

覚鑊の曼茶羅思想に与えた安然教学の影響

大 谷 欣 裕

一 問題の所在

興教大師覚鑊（一〇九五―一一四三・以下覚鑊）の曼茶羅観は『界曼茶羅略釈』^①（二卷・以下『界略釈』）に詳説されているが、『界略釈』の内容を基に、覚鑊の兩部曼茶羅思想を考察した小峰弥彦氏は、覚鑊の曼茶羅思想の背景思想には、総じて伝空海（七七四―八三五）撰の『秘藏記』並びに『大日經疏』が大きく賦与したものであることは否めない』と指摘している。^②

まず、胎藏界曼茶羅であるが、第一に覚鑊は、胎藏界曼茶羅を「胎藏界」と称し、これを「理曼茶羅」と理解しているが、この「理曼茶羅」という用語については既に『秘藏記』に、「胎藏者理也。金剛者智也。」とあることから、『秘藏記』との関わりを考慮に入れる必要があると述べている。第二としては、覚鑊が胎藏界曼茶羅を四種法身説によつて解釈している点に着目し、これも『秘藏記』に於いて、中台の毘盧遮那を法身、四仏を応身、釈迦を化身、外金剛部の龍鬼等を等流身というように、曼茶羅を四種身によつて解釈し

ていること^④に起因すると指摘している。或いは別の箇所では、四種曼茶羅及び三種世間は六大能生であることを明かす上で「能生_下随類形 諸法与_三法相_一 諸仏与_三声聞_一 救世因縁覺慤勇菩薩衆_下 及仁尊亦然 衆生器世間 次第而成立 生住等諸法 常恒如是生_上」の十句の誦を掲げ、さらにこれを「諸法・法相」の一句を自性身、「諸仏」を受用身、声聞より仁尊を變化身、「衆生」の二字を等流身にそれぞれ配当する内容も看取される。これらの内容から小峰氏は、「覚鑊の四種身の配当と、『秘藏記』の配当とが若干ことなる見解もなされているが、胎藏曼茶羅を四種身説で解釈していることは確認できる」とし、しかも曼茶羅を四種身説で見る考えが「少なくとも『秘藏記』以降、胎藏曼茶羅解釈の基本としてすでにできていたと考えたい」という前提のもとに、「（『秘藏記』が）覚鑊の曼茶羅解釈に影響を与えたのである」とも指摘している。

そして第三としては、『界略釈』にみられる次の記述が、『大日經疏』からの引用によつて成立しているため、『大日經疏』そのものが、覚鑊の胎藏界曼茶羅理解の根拠となつていゝとする。

①得_二胎藏名_一者、寄_二蓮華_一顯_レ之、大日如來本地淨心、即華台具體。四仏四菩薩醍醐果徳、如_二衆実俱成_一。十世界微塵數金剛密慧差別智印之金剛手等、猶如_二華葉_一。三乘六道無量応身之二乘人天等、猶如_二根・茎・条・葉_一。榮暉相間。如_レ是衆徳輪円周備故名_二曼荼羅_一也。②曼荼羅者、梵語也。此云輪円具足。亦名_二發生諸仏_一。十方三世諸仏・菩薩・賢聖・金剛天等、皆悉從_二大日心地_一發生、集_二聖衆_一顯現故、云_二發生諸仏_一。或云無比味、無上過味、如_二衆味中醍醐第一_一。此曼荼羅、亦復如_レ是。③以大日如來加持力故、從_二仏菩薩自証徳_一、現_二八葉中胎藏身_一。從_二金剛智印_一、現_二第一重金剛手等_一、諸内眷屬。從_二大悲萬行波羅蜜門_一、現_二第二重摩訶薩埵大眷屬_一。從_二普門方便_一、現_二第三重一切衆生、喜見隨類之身_一。以_二輪王灌頂_一方_レ之、第三重如_二万国君長_一。第二重如_二朝廷百揆_一。第一重如_二宗枝内弼_一。中台如_二垂拱之君_一。

（『興教大師全集』卷上・三〇七―三〇八）

右の文のうち、①と③は共に『大日經疏』卷三「入曼荼羅具縁真言品第二」からの引用であり、『大日經疏』の原文は、①↓③と文章が続いているが、覚鑊はその中間に同じく『大日經疏』卷四の取意と考えられる②の文を挿入する形で、胎藏界曼荼羅を解説しているとする。そしてこのような『大日經疏』からの引用を受けて氏は「換言すれば『大日經疏』の説がそのまま、覚鑊の胎藏曼荼羅理解の基本なのである」と述べている。

次に、金剛界曼荼羅について氏は「胎藏界ほど明確ではないが、

四種身説で捉えようとしている」と述べ、特に自性身については「大日如來は自性身であると明言こそしていないが、『_五略釈』全体から考えてみると大日如來を自性身に配することはできよう」とし、さらに五忿怒身、五大菩薩を五仏に配することについてはこれも、次に示す『秘藏記』の内容を根拠として、「その影響の大きいことが知られる」と指摘している。

五部定_二母主_一如何。毘盧遮那仏部主。源故無母。阿閼金剛部主。金剛波羅蜜為_レ母。宝生宝部主。宝波羅蜜為_レ母。無量壽蓮華部主。法波羅蜜為_レ母。不空成就羯磨部主。羯磨波羅蜜為_レ母也。是則_レ掬_二四波羅蜜出_一生四仏之義_上所_レ立之文也。掬_二宗心_一有_二四仏互出_一生四波羅蜜之義。然則得_二四波羅蜜為_レ主四仏為_レ母或曰不得_レ得_レ何故曰_レ不得_レ得_レ。答曰。四波羅蜜為_レ定、四仏為_レ慧。定則女、慧則男。是故不得_レ得_レ。四波羅蜜為_レ主、四仏為_レ母。…中略…三部定_二母主_一如何。仏部

金輪仏頂為_レ主。虚空眼為_レ母。又云仏眼。蓮華部馬頭觀音為_レ主。伴陀羅尼縛

字尼是白衣觀音也。此為_レ母。金剛部金剛手為_レ主。又云三世勝金剛忙麼鷄為_レ

母。建立三部時、宝部・羯磨部何掬耶。一一部別宝部、羯磨

部相掬。（『弘法大師全集』二・三九―四〇）

また、松崎恵水氏も『_五略釈』の内容から同じく覚鑊の兩部曼荼羅思想を考察しており、その結果覚鑊は「兩部大經あるいは空海の教学をその根本的立脚点としながらその徹底化を図」ったと指摘しており、赤松祐道氏も「覚鑊聖人が弘法大師の著作をどのように取り扱っていたかも覚鑊聖人の教学思想を考える上で必要となる」と

述べ、空海教学との関連性から曼荼羅思想を考察すべきことを示唆している。^⑨

一方、苦米地誠一氏は、覚鑊の教主義という観点から覚鑊の著作を網羅的に検討し、その特色を紹介している。その結果、覚鑊は、基本的には空海の法身説法を継承しつつも、そこには台密教学からの影響が強いとし、中でも五大院安然（八四一―九一五？・以下安然）の『教時義』にて展開されている四一教判を摂取し、東台両密を融合させた立場をとる事を指摘している。^⑩

そこで本稿では、覚鑊の曼荼羅観が、『秘藏記』や『大日経疏』を起点に展開されていると指摘する小峰氏の見解の妥当性を検討し、覚鑊の曼荼羅観及び、諸尊統合の理論は、安然説からの影響によって形成されているということを指摘したい。

二 『咒略釈』に於ける覚鑊の八大法身及び胎蔵界曼荼羅理解

まず、小峰氏の指摘に倣い『咒略釈』所説の胎蔵界曼荼羅を纏めると、次のようになる。

【『咒略釈』に於ける胎蔵界曼荼羅観】

中台八葉院（大日尊の八大法身）

中央大日如来⇨大日清浄法身の理

東方宝幢仏⇨菩提心門

南方開敷仏⇨菩提行門

西方阿弥陀仏⇨菩提智慧門

北方天鼓雷音仏⇨入涅槃門

普賢・文殊・観音・弥勒⇨如来の因行、四智⇨果徳……四智・

四行⇨八大法身

初重 遍知院……仏の衆徳莊嚴……法身の徳 如来部 自受用身

持明院……持明使者 如来部

観音院……仏の大悲三昧……解脱の徳 蓮華部

金剛院……仏の大慧の用……般若の徳 金剛部

二重 文殊……仏の智徳

除蓋障尊……仏の福徳

虚空蔵尊……仏の無尽莊嚴 他受用身

三重 釈迦……現世の主 変化身

六道凡夫等 等流身

このように覚鑊は、中台八葉を中心とし、これを三重の構造によって取り囲む曼荼羅を構築しており、さらに初重の四院については自受用身、二重の文殊・除蓋障・虚空蔵を他受用身、第三重の釈迦を変化身、六道凡夫を等流身と理解している。そうすると、残る中台八葉院は自ずと、自性身・法身に規定されよう。

小峰氏は右の構図の背景思想を『秘藏記』に求めている。たしかに、小峰氏の指摘する通り、胎蔵界曼荼羅を四種身に解釈し、その

中の中台八葉を自性身・法身と規定することについては、『秘藏記』の内容と合致する所ではある。また、そもそも中台八葉院の八尊とは、『大日経疏』卷二〇「囑累品」をみると、

金剛手者即是大日如來、觀世音者亦是大日如來、文殊師利者亦是
大日如來、乃至鬼神・八部一一亦有此義。亦即是成_二大日如
來_一。体雖_二是一_一而義各異。所以瑜伽中云毘盧遮那言。我即是文
殊觀音等。我即是天。即是人。即是鬼神。即是龍鳥。如是等
無_レ不_二即是_一者。由_二此義_一也。…中略…又觀音・文殊・普賢・
弥勒已在_二八葉中_一。即大日如來大法身也。為_レ度_レ人故漸出_二于外_一。
故次囑中復有_二文殊觀音等_一。以_レ類可_レ解也。又云。如_二八葉中普
賢_一是菩提心、文殊是慧、弥勒是悲。此菩提心即是大日如來。
不_レ離_二大日如來_一有_二菩提心_一也。大慧即是大日如來。不_レ離_二此
大日如來_一別有_二慧也_一。悲即是大日如來。不_レ離_二於大日如來_一別
有_二悲也_一。當_レ知準_レ此說_レ之_二功德皆爾_一。猶如_二天台法身・般若・
解脫義_一。(『大正藏』三九・七八八下)

というように、中尊の法身大日如來の徳を標幟したものであるため、
これら八尊が法身と規定されるのは贅言を要しない。しかし覚鑊は
中台八葉の法身を、敢えて「八大法身」と規定しており、そして覚
鑊がここで八大法身と明言していること自体に、根本的な問題があ
ると考えられるのである。そこで覚鑊の八大法身理解について以下、
具体的に検討してゆきたい。『我略釈』をみると次のように説か
れている。

八葉是大日尊八大法身。中方大日清淨法身理。東方宝幢仏、是
菩提心門仏。南方開敷仏、是菩提行門仏。西方阿弥陀仏、是菩
提智慧門仏。北方天鼓雷音仏、是入涅槃門仏。安_二住諸子於秘
密藏中_一、我亦住_二中入涅槃_一、是利生圓滿義。機縁薪尽、応化火
滅。即是義也。普賢・文殊・觀音・弥勒如來因行。四智是果徳
也。四智四行、是名_二八大法身_一也。第一重上方遍知院等、是法
身徳。南方金剛手院等、是般若徳。北方觀自在院等、是解脫徳。
第二重等覺以還、法身菩薩、如_二文殊・除蓋障・地藏・虚空藏
四菩薩_一是其路也。第二重是變化生身、如_二文殊生_一南方多羅聚
樂等_一也。(『興教大師全集』上・三〇九)

このように覚鑊は、中台八葉院の諸尊である普賢・文殊・觀音・弥
勒の四因行と、その果徳である四智、すなわち宝幢仏、開敷華王仏、
阿弥陀仏、天鼓雷音仏を総じて八大法身と解釈している。

ところで覚鑊は、自身の仏身論を形成する上で「六大法身」や
「五種法身」^⑩といった、多種多様な法身觀を展開させた学匠である
ため、中台八葉の諸尊を八大法身と理解することに対して、さほど
違和感を覚えることはないと思われる。ところが、実際のところ中
台八葉の諸尊を「八大法身」と明言するのは極めて稀な事例であり、
そして少なくともこれは、覚鑊独自の解釈ではないということを予
め押さえておく必要がある。

では、覚鑊以前の段階に於いて、中台八葉の諸尊を八大法身と表
現した具体例は一体、如何なる文献から確認されるのであろうか。

そこで言及しておきたいのが、小野僧正仁海（九五―一〇四六・以下仁海）の『八法身記』である。題名から判断するに本書は、正しく件の八大法身について言及した書物であると推察されるが、写本が現流すると言われているものの、その所在は確認できない。そうになると、仁海の八大法身観を辿る方法がないのかといえれば決してそうではなく、幸いなことにその内容を窺い知ることのできる著作が一部、現存している。それが『^{曼茶羅}ミチミ抄』である。本書奥書には、

小野僧正御手跡本在北院云々

仁安二年十一月十三日於理趣院書了 範杲

二交了

（『大正図像』一・二〇九下）

とある。また、江戸期の輝潭（？―一八二八？）撰『現図曼茶羅略要』（天地二巻）天巻、仁海の曼茶羅に関する著作目録をみると、次のように『八法身記』と『^{曼茶羅}ミチミ抄』が同本異名の関係にあることを伝えている。

一。『曼茶羅抄』

一卷 仁海述。元杲付法。釈書四。

本朝四十九

一。『両界諸尊抄』

一卷 同作

一。『両界図』

一卷 同作

一。『三部曼茶羅抄』

一卷 同作

一。『八法身記』

亦云『^{曼茶羅抄}ミチミ抄』

同作

（『続真言宗全書』二四「曼茶羅部」・一八〇下）

また、謙順（一七四〇―一八一二）編『諸宗章疏録』巻三「真言

宗」・「仁海」の項にも、同様の記載が確認される。従って、ここでは輝潭や謙順の指摘に倣い、『八法身記』と『^{曼茶羅抄}ミチミ抄』を同一の文献と見なした上で、『^{曼茶羅抄}ミチミ抄』から仁海の八法身観を探ってみたい。『^{曼茶羅抄}ミチミ抄』の冒頭では、八法身に関して次のように述べている。

大日八法身、為^レ度^レ人故漸、出外。次、以^レ類可^レ解^レ之

執金剛対^ニ智慧門^一降伏方便。普賢対^ニ如^一、法身門^一寂息方便。観

音対^ニ蓮華門^一増益方便。無量不思議妙用摂^ニ方^一在其中^一

遍知印法身徳、南金剛手般若徳、北観自在解脱徳、第二重等覚

以還法身菩薩。第三重变化生身。一切仏心名^ニ遍智印^一。五輪^ヲ卒

塔婆^ヲ、火輪三角為^ニ仏心^一。其壇円形有^ニ八^一点。一切衆生此相應

故。肉心八分為^ニ三角火輪^一。此仏心遍知^ニ諸法^一。心王大日成^ニ等

正覚^一時、一切心数入^ニ金剛界^一成^ニ智印^一。諸執金剛一向仏智印。

定慧兼^ニ慈悲^一。如^ニ蓮出^一水。名^ニ蓮華手^一。第二重東金色世界文殊

表^ニ仏智徳^一。南除蓋障表^ニ仏断徳^一。西虚空藏表^ニ莊嚴^一。第三重^ヲ釈

迦^ヲ是世界主故偏為^ニ二其主^一（『大正図像』一・二〇五上）

仁海は、前掲『大日経疏』の「大日如來の大法身」を「八法身」と理解し、八法身が衆生を済度するといひ、八法身のうちの執金剛は降伏、普賢は寂息、観音は増益にそれぞれ代表される、無量にして不可思議なる諸菩薩の妙用が余すところ無く摂在される旨を明かしている。そして、胎藏界曼茶羅の中台八葉院の諸尊と、第一重の遍知院、及び第二重、第三重それぞれの対応関係と、その功德について

て述べている。ここで、仁海と覚鑊の兩説を比較してみると、仁海の説では中台八葉の五仏と、四菩薩のうちの弥勒菩薩に関する言及がみられないが、遍知院以下の内容については見事に合致している。とはいえ、右の比較検討の結果を承けて、覚鑊が仁海の説をそのまま踏襲したと断言するのは些か早急であり、しかも仁海の「八法身」の解釈、ひいては、『ミヤミ抄』そのものが実は問題を孕む文献なのである。

そこで今暫く八大法身の思想的淵源を探つてゆくと、実はこれが安然の『菩提心義抄』卷三「三摩地門行相」に説かれるものであり、なおかつ仁海、及び覚鑊の説は他ならぬ、安然の八大法身理解そのものとなっていることが判明したのである。そこで煩を厭わず、仁海、覚鑊、安然の三師の内容を対照させてみたい。まず、仁海と安然説を対応させると、次のようになる。(尚、『ミヤミ抄』の原文は本来一連となっているが、ここでは対照上、区切った形で掲載しておく。)

○『菩提心義抄』卷三

『抄記』云。觀音・文殊・普賢・弥勒已在三葉中。即大日如來大法身也。為度人故漸漸出于外。故次圖中復有殊・觀音等。以類可解也云云。又『義釈』云。執金剛對金剛智慧門・降伏方便、普賢對一如如法身門・寂災方便、觀音對蓮華三昧門・增益方便。舉此三点

○『ミヤミ抄』

大日八法身、為度人故漸、出外。次、以類可解之

執金剛對智慧門・降伏方便。普賢對一如、法身門・寂息方便。觀音對蓮華門・增益方便。無量不思議妙用攝方在其中

覺鑊の曼荼羅思想に与えた安然教學の影響

則無量不思議用皆已攝在其中云云。〔私云〕八葉是大日尊八大法身。第一重上方遍知印等是法身德、南方金剛手等是般若德、南方觀自在等是解脫德。如『涅槃經』云。三德秘密藏中安置一切衆生。我亦自安住其中。取意文即是仏地三德秘密藏云云。第二重是等覺以還身菩薩。如文殊等四法王子皆是其流云云。第三重是變化生身。如文殊生南天多羅

落等也云云。問。且約部主何故名遍知印。乃至何故名八方天護方神耶。答。〔私云〕一切仏心名遍知印。五輪率都婆塔火輪三角以為仏心。其壇円形。固有八點。一切衆生亦与此相應。故肉心八分以為三角火輪。以此仏心遍知諸法。名正遍知。一心王毘盧遮那成正等覺時、一切心數莫不入此金剛界中。變成智印。約菩提義。則有無量智印差別。約仏陀義。則有無量持智印者。身口意密速疾無礙。手持金剛故名金剛手。二諸執金剛一向是仏智印。今蓮華尊義兼定慧。又兼慈悲。無累解脫如蓮出水。為表此義。手持蓮華。故名蓮華手。第二重中、東方金色世界文殊以表

遍知印法身德、南金剛手般若德、北觀自在解脫德、

第二重等覺以還法身菩薩。

第三重變化生身。

一切仏心名遍智印。五輪率都婆塔火輪三角為仏心。其壇円形有八點。一切衆生此相應故。肉心八分為三角火輪。此仏心遍知諸法。

心王大日成正等覺時、一切心數入金剛界成智印。

諸執金剛一向仏智印。定慧兼慈悲。如蓮出水。名蓮華手。

第二重東金色世界文殊表仏智德。

分仏智徳^四南方世界除蓋障尊
以表^三分仏断徳^五北方世界地藏
菩薩以表分仏福德^六西方世界虛空
藏尊以表^三分仏莊嚴^七第三重中釈
迦是此世界主。故偏為^三其主。

（『大正藏』七五・五〇七上〜中）

このように、非常に断片的にはあるものの、仁海は『菩提心義抄』を踏襲していることが明らかである。次に、覚鑊と安然の説を比較してみると次のようになるが、覚鑊は、仁海の説を依用したというよりも、安然説からの直接的な影響を受けていることが窺知されるのである。

○『菩提心義抄』卷三

私云。八葉是大日尊八大法身。

第一重上方遍知印等是法身徳、南方金剛手等是般若徳、南方観自在等是解脱徳。如^二『涅槃經』云^一。三德秘密藏中安^二置一切衆生^一。我亦自安^二住其中^一取意文即是仏地三德秘密藏云云。第二重是等覺以還身菩薩。如^二文殊等四法王子皆是其流^一云云。第三重是变化生身。如^二文殊生^一南天多羅落等^一也云云

（『大正藏』七五・五〇七上）

南除蓋障表^二仏断徳^一。

西虚空藏表^二莊嚴^一。

第三重^{釈迦}是世界主故偏為^三其主^一（『大正図像』一・二〇五上）

○『釈略釈』

八葉是大日尊八大法身。中方大日清浄法身理。東方宝幢仏是菩提心門仏。南方開敷仏、是菩提行門仏。西方阿弥陀仏、是菩提智慧門仏。北方天鼓雷音仏、是入涅槃門仏。安^二住諸子於秘密藏中^一我亦住^二中入^一涅槃^一是利生圓滿義。機縁新尽、応化火滅。即是義也。普賢・文殊・観音・弥勒如来因行。四智是果徳也。四智四行、是名^二八大法身^一也。第一重上方遍知院等、是法身徳。南方金剛手院等、是般若徳。北方観自在院等、是解脱徳。第二重等覺以還、法身菩薩、如^二

文殊・除蓋障・地藏・虚空藏四菩薩^一是其路也、第三重是变化生身、如^二文殊・生南方多羅聚樂等^一也。（『興教大師全集』上・三〇九）

このように安然は、第一重の遍知院については『大日経疏』所説の天台の三徳に倣い、上方は「法身の徳」、南方の金剛手院は「般若の徳」、北方の観音院は「解脱の徳」というように、それぞれ配当し、そして第二重、第三重は变化身、等流身と見している。尚、『菩提心義抄』では、観音院が金剛手院と同じく南方に配されているが、これは恐らく北方の誤りであろう。それはさておき、中台八葉の諸尊を「八大法身」と定義したのは、「私に云く」とあるように、安然教学に於いて初めて為されたものであることが重要なのである。よって覚鑊の中台八葉観、及び胎藏界曼荼羅の三重構造は、『秘藏記』ではなく安然説を踏襲したものであると謂わねばならない。

また、右の対照にて付した『釈略釈』の波線部の箇所に関して、これは同じく安然の『菩提心義抄』巻五「行願門余問答」の内容と合致するのである。

私云。毘盧遮那有^二四種身^一。若^二『瑜祇經』云^一。金剛界遍照如来是自性身。若^二『分別聖位』云^一。二種受用身。毘盧遮那是二受用身。若^二『撰真実経』云^一。毘盧遮那示^二現化身^一来^二至釈迦菩提道場^一。又『義訣』云。龍樹先持^二誦毘盧舍那真言^一感^二得現^一其真身^一為

説持念法。是變化身。若『略出經』云。毘盧遮那天等來會者是等流身云云。大日宗云。方便為究竟名大日尊。『金剛頂』云。清淨法身名毘盧遮那。豈非一仏内証・外化二義云云。『梵号礼懺』云。中略。此云不動如來。旧云阿閼毘也。今随旧訳、亦云阿閼。中略。大日宗云。東方宝幢仏謂菩提心猶軍幢旗。金剛頂宗云東方是菩提心故。以大菩提心不動之義名不動仏。豈非一仏異名云云。『梵号礼懺』云。中略。此云宝生如來。『金光明』云南方宝相。新訳『經』云宝幢。中略。大日宗云。菩提行義名華開敷。『金剛頂』云。福德莊嚴聚義名宝生仏。如『菩提心論』能含無量珍宝三摩地。豈非菩提菩提行即福德聚云云。『梵号礼懺』云。中略。大日宗云。証菩提義名無量壽。『金剛頂』云。受用智悲門義名阿弥陀。所言証菩提、受用種子一仏明矣。『梵号礼懺』云。中略。此云不空成就如來。『三摩地礼懺』云。釈迦牟尼仏此云能寂。『疏』云。釈迦牟尼仏是不空成就仏異名也。『金光明』云北方微妙声仏。大日宗云。北方天鼓雷音仏。中略。大日宗云。入涅槃義名天鼓音。『金剛頂』云。大精進門名不空成就、又云變化身名釈迦牟尼。如『涅槃經』安住諸子秘密藏中、我亦住中入大涅槃。故知。入涅槃是利生滿義。諸經所説機縁薪尽、応化火滅即是義也。若爾鼓音妙声不空釈迦。豈非一仏四名云云。〔大正藏〕七五・五五二上、下

安然是こで五仏の異名、及びそれぞれの教理内容を諸経論からの

覚鑊の曼荼羅思想に与えた安然教学の影響

引用によつて併説していることがわかるが、安然が「大日宗云く」もしくは「金剛宗、金剛頂に云く」として解釈する部分と、『略釈』に於ける覚鑊の説とがそれぞれ一致している。特に北方の天鼓雷音仏について、覚鑊は出拠を明かしてはいないものの、『涅槃經』からの引用部分も含め、すべてが一致していることが容易に読み取れるのである。

また、覚鑊は三身一体の仏身觀を展開しているのであるが、『略釈』をさらにみてみると、覚鑊の仏身觀には、同じく安然の『教時義』卷一からの直接的な影響がみられるのである。

○『教時義』卷一

問、諸経論説仏得三身。謂法如如、智如如是名法身。十地究竟顯得報身、自受法樂名自受用身。為諸菩薩他受法樂名他受用身。隨衆生感、处处示現名變化身。中略。

胎藏界会中台八葉名自性身、三部眷属自受用身、第二重中諸大心衆他受用身、第三重釈迦仏等名變化身、九界眷属名等流身。中略。

諸経論中名法如如、智如如法身。大日如來自以一身更受法樂。諸経論中名自受用身、大日如來以此諸身令諸具感菩薩見受法樂。諸

○『略釈』

凡仏得三身、謂法如如、智如如、是名法身。十地究竟、顯得報身、自受法樂、名自受用身。為普賢等諸菩薩、他受法樂、名他受用身。隨衆生感、处处示現、名變化身。

胎藏界中台八葉、名自性法身。三部眷属、是自受用身。第二重中諸大心衆、即他受用身。第三重釈迦仏、名變化身。示六道凡聖等名等流身。大日如來、内証此等諸身。

諸経論中、名法如如・智如如・法身仏。大日如來、自以此諸身受法樂。諸経論中、名自受用身。大日如來、以此諸身、令諸具戒

論中名ニ他受用身、大日如來以此諸身隨諸凡夫所感、普現諸經論中名ニ応化身。如此三身大日一体。『大正藏』七五・三八二上―中

菩薩受法樂一名他受用身。大日如來、以此諸身、隨諸凡夫所感、普現諸經論中、名ニ応化身。如此三身、大日一体也。『興教大師全集』上・三一―三一

(二)

右の内容から、『月と略釈』に於いて覺鑊は、『教時義』での「間い」に該当する部分も含めて自身の仏身觀を構築しており、特に中台・第二重・第三重の三層による胎藏界の構成については、『菩提心義抄』と『教時義』の二つの内容を継承していることが理解される。但し安然の場合、三身と大日の一体については続けて次のように述べている。

故『羅索經』說。三身一体皆平等毘盧遮那自性身。『金剛仙論』云。即三而一、即一而三。言三不傷其二、言一不壞其三。

三。『天台宗云』。性得三因一体三名。故成修得三因一体三名。

能顯仏果三身一体三名乃至三身非生現生非滅現滅。此義亦与此宗意同。『大正藏』七五・三八二中

安然の『不空羅索經』や『金剛仙論』所説の三身一体説を理論的根拠とし、さらには「天台宗に云く…」というように、天台教学との同等性をも示唆している。その一方で覺鑊は、天台教義との等質性を示す部分からの引用は控えているものの、「如此三身、大日一体也。」と述べていることから、安然の三身一体説を継承していることは明白であり、かつまた覺鑊の仏身觀には結果的に、天台教学の

影響も大きく関与していることになるといえよう。

以上のことから覺鑊の胎藏界理解は、安然説の影響下で構築されていると考えられるのである。また、曼荼羅思想を安然説から暗に把捉しようとした仁海の態度については、初期の東密教団、特に觀賢（八五三―九二五）以降、濟運（一〇二五―一一一五）に至るまでの教学形成の一端を窺い知る意味でも非常に重要であり、仁海の説を、こういった日本密教に於ける両部曼荼羅思想の形成期の一説として把捉しておく必要性はあると考えられる。

三 金剛界曼荼羅解釈と二輪身説

このように、覺鑊の胎藏界曼荼羅思想は安然教学を敷衍する形で形成されていた。では、一方の金剛界曼荼羅についてはどうかという、小峰氏の見解から次のような構図となる。

【『月と略釈』に於ける金剛界曼荼羅觀】

金剛界ニ五智

大日如來……仏部

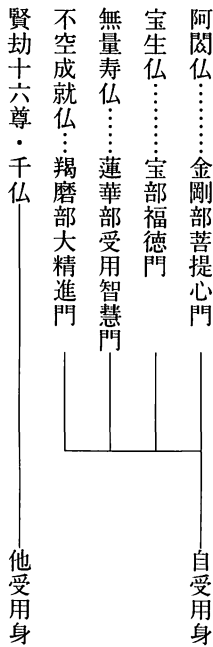
阿閼仏……金剛部菩提心門

宝生仏……宝部福德門

無量寿仏……蓮華部受用智慧門

不空成就仏……羯磨部大精進門

賢劫十六尊・千仏



二十天 ————— 等流身

大日如來の變化身 ↓ 轉法輪菩薩・不動明王
阿閼仏の變化身 ↓ 普賢菩薩・降三世尊
宝生仏の變化身 ↓ 虛空藏菩薩・軍荼利
阿彌陀仏の變化身 ↓ 文殊師利・大威德尊
釈迦仏の變化身 ↓ 金剛夜叉明王
五仏の變化身 ↓ 五大力菩薩・四大天王・五万龍神

まず、大日如來と四仏の關係については『**五略釈**』をみると、次のようにある。

胎藏界説三部諸尊。仏部・蓮華部・金剛部。此金剛部、説五部諸尊。大日如來淨妙法身、即仏部也。阿閼仏、金剛部菩提心門仏。宝生仏、即宝部福德門仏。無量寿仏、蓮華部受用智慧門仏也。不空成就仏、羯磨部大精進門仏。此四仏是自受用身。賢劫十六尊千仏、是他受用身。二十天、是等流身。（『興教大師全集』卷上・三一五―三一六）

このように、覺鑊は金剛界の五部と諸尊の關連性を示しているのであるが、『教時義』によつて、胎藏界曼荼羅を三部によつて解釈していたのと同様に、『**五略釈**』の金剛界理解に関しても、結局のところは、『教時義』の金剛界会の五身を繼承していることになる。すなわち『教時義』卷一の内容と対照すると、次のようになる。

○『教時義』卷一

金剛界会五部諸尊總為五身。一仏部淨妙法身、金剛部金剛堅固自性身、宝部福德莊嚴身、蓮華部受用智慧身、羯磨部作變化身。此四身是自受用身、賢劫眷屬是他受用身、二十天是等流身。大日如來内証此等諸身。

（『大正藏』七五・三八二中）

續けて『**五略釈**』では、五部と五仏、及び五仏の教理内容の關係性が次のように説かれている。

諸經論等、如來藏理、般若仏母、諸法実相、虛空仏性、此等皆大日如來異名也。諸經所説普賢行願、是阿閼仏菩提心門異名。福德莊嚴法門、是宝生仏異名也。智慧莊嚴法門、是弥陀異名也。『法華經』之「化一切衆生、皆令入仏道本誓滿足」之説、釈迦如來不空成就仏之異名。轉法輪菩薩・不動明王、大日化。普賢菩薩・降三世尊、阿閼化。虛空藏菩薩・軍荼利尊、宝生化。文殊師利・大威德尊、弥陀化。金剛夜叉明王釈迦化。五大力菩薩、四大天王、五方龍神等、皆是五仏變身、利生異形也。五十塵数仏者、利益普旋。内証外現、以不可測者也。（『興教大師全集』上・三一六―三一七）

○『**五略釈**』

此金剛部、説五部諸尊。一。大日如來淨妙法身、即仏部也。阿閼仏、金剛部菩提心門仏。宝生仏、即宝部福德門仏。無量寿仏、蓮華部受用智慧門仏也。不空成就仏、羯磨部大精進門仏。此四仏是自受用身。賢劫十六尊千仏、是他受用身。二十天、是等流身。

（『興教大師全集』卷上・三一五―三一六）

覺鑊は「如來藏理」・「般若仏母」・「諸法実相」・「虛空仏性」をすべ

て大日如來の異名とし、その他四仏については順に、「普賢行願・菩提心門」を阿閼仏、「福德莊嚴法門」を宝生仏、「智慧莊嚴法門」を阿彌陀仏、一切衆生を法華一乘に誘引せしめる『法華經』の本懷を釈迦（不空成就）仏というように、それぞれの仏の教理的役割をもつて異名と為しているのである。

ところで、五つの異名のうち、不空成就仏の箇所に『法華經』の名を明言していることについて松崎氏は、「当時最も有力であつた法華一乘を意識していたことの一つの表れではないかと考えられて興味深い」と指摘しているが、この点は覺鑊のいう五仏の異名が、やはりこれも安然の『菩提心義抄』の内容と合致することを踏まえた上で考えなければならないと思われる。すなわち、『菩提心義抄』卷五「行願門余問答」には次のようにある。

問、此五仏約法門若有異名耶。答、中略、若別言之、
華嚴名性海果分、方等名如來藏、般若名般若父母、法華名諸仏実相、涅槃名虚空仏性。若在衆生名毘富羅種子、若在分教名毘仏略。若在仏地名毘盧遮那。皆是大日如來異名也云云。『大方廣莊嚴經』釈迦成道欲轉法輪時、有菩薩名轉法輪。即以輪宝奉獻世尊。世尊受之持轉法輪。其輪唯一自具八幅、以標一実仏智具八法身。是大日尊正法輪身云云。『金剛手光明灌頂經』中、不動明王是毘盧舍那如來化身。一持之後生生不捨。行者設令世累未斷有所違犯明王亦許。千犯千悔終不忘捨。其明王身一目少眇。『義釈』云。諸仏

明鑒唯一無二故閉一目云云。是大日尊教令輪身云云。若諸經中大菩提心堅固不動是阿閼仏異名云云。若『華嚴經』普賢行願是金剛薩埵異名。如『瑜祇經』云。唯此仏刹尽以金剛自性清淨所成密嚴華嚴。以諸大悲行願圓滿云云。若『梵網』、『瓔珞』五十二位斷惑証理是降三世異名。如『瑜祇經』云。以金剛光明遍照清淨不染種種業用、方便加持救度有情演金剛乘。唯一金剛能斷煩惱云云。若諸經中福德莊嚴諸度法門是宝生仏異名云云。若諸方等大集經。十方菩薩集会說法。從東西方虚空藏菩薩來。是宝金剛異名云云。若『大灌頂經』等云、禪提比丘滅後楊枝泉水散洒病者除病增福。是甘露瓶異名云云。若諸經中智慧莊嚴諸度法門は無量壽仏異名。如天台云。以阿彌陀為法門主云云。若諸般若文殊般若等說圓融般若。如『五仏頂經』云。文殊是般若父母。是金剛利異名云云。諸般若等六通六度利益六道。如大威德瑜伽。此尊六足以表六度六通利益六度。是焰曼尊異名云云。若諸經中引導衆生畢竟成仏是不空成就仏異名云云。若『法華』中如我昔所願今者已滿足。化一切衆生皆令入仏道是藥金剛異名云云。中略、又『無行經』貪欲即是道。悲痴亦復然。如是三法中具無量仏法。若人求仏道欲斷貪嗔痴。是人去仏道譬如天与地。是金剛藥叉異名云云。『大正藏』七五・五五三中、五五四上

覺鑊が大日如來の異名を称えた四つの理に関しては、台密教学に於ける顕密二教判の中、唯理秘密教の範疇内に包摂されるものであり、

また五時教判との関係からいえば、阿含時を除いた余の四時と対応関係にあると考えられる。そうなる¹と覺鑊は、諸經論の教理内容と金剛界五仏との相互関係を、台密教判に則つて説示していることになる。以上のことを勘案すると覺鑊自身は、「当時最も有力であつた法華一乘を意識していた」というよりも寧ろ、『菩提心義抄』からの影響によつて、必然的にこのような形になつたと見るほうが、穩当であると考えられる。

また、覺鑊の仏・菩薩・明王の三尊形態については、北方の業金剛を欠くものの、他の四方の諸尊の關係については、これも『菩提心義抄』と大方一致する。そしてここにみられる諸尊については、五仏爲本の二輪身との關連¹⁰が推察される¹¹とも考えられる。特に、右の波線部にもみられるように、安然是¹²轉法輪菩薩と不動明王をそれぞれ、大日如來の正法輪身・教令輪身と解釈しているが、安然の二輪身説が覺鑊に与えたことを示唆する内容については、例えば覺鑊四十七歳に当たる永治一（一一四一）年、八月二十五日から十一月二十二日の三ヶ月間に亘つて開かれた伝法会での講義内容である、『十住心論談義』（『打聞集』所収）をみると、三身それぞれに正法輪身と教令輪身の二輪身があると説いている。

又云、自性・受用・變化之三身、各有正法輪・教令輪二身。此二身即是等流身也。等流身遍三身。例如羯磨身遍三曼荼羅。九種住心、各有秘密趣。是即等流身也。合前二身為自性身、合後二身、為一變化身。變化身九界能化也。等流身九

覺鑊の曼荼羅思想に与えた安然教學の影響

界隨類身也。故合為一身。（『興教大師全集』上・五六〇）

覺鑊は自性・受用の兩身を自性身に、變化・等流の二身を變化身と理解し、四種身を二種身とみる立場を表明しているが、加えて正法輪身と教令輪身の二輪身を、四種身のうちの等流身とする特異な仏身觀を建立している。しかし、九界の隨類身である等流身を、二輪身思想によつて把握する内容については、『菩提心義抄』卷四「三摩地門行相」をみると、次のようにある。

問。菩提樹下大日化身亦有三十七尊互相涉入。答。果地三十七尊自在五種。一自性身三十七。中略。二自受用三十七。中略。三他受用三十七。中略。四化身三十七。如『守護經』釈迦所説。金剛城中四三十七尊云云。五等流身三十七。如『金剛頂瑜伽經』中五仏各現二輪。五大菩薩是正法輪、五大忿怒是教令輪。如五仏者一切皆然。中略。故知、菩提樹下空中化仏亦有三十七尊互相涉入。（『大正藏』七五・五二四下）

安然是、金剛界三十七尊が自性身、自他受用身、變化身、等流身の五身それぞれに渉入する様子を明かす中、等流身と三十七尊の關係を示す上で、正法輪と教令輪の二輪身を説き、この二輪身にも三十七尊が具有するというのである。安然是ここで、二輪身を等流身と明言している訳ではないが、覺鑊説にみられるような原意は、右の内容からある程度は汲み取ることができると思われる。

覺鑊といへば、奥州東大寺君との關係上から、三輪身思想の形成

過程を考察する上で非常に重要な役割を担う学匠であるが、覚鑊教学に於いても、安然が示した五仏為本の二輪身思想からの影響が垣間見られるのである。

四 『五界秘事』に於ける両部曼荼羅觀

次に、『五界秘事』について少しく言及しておきたい。赤松氏も指摘するように、本書もいわば、覚鑊の両部曼荼羅觀を知ることのできる文献と評されようが、本書については若干の問題がある。というのも、『五界秘事』では、両部曼荼羅に於ける諸尊の配当を説く面に於いて、金剛界を五部、胎藏界を三部とみており、この点に関しては密教教学の基調であるから、特に問題視する必要性はないといえる。ところが、問題なのは金剛界の仏部・宝部・金剛部・蓮華部・羯磨部の五部と諸尊の關係性についてである。すなわち『五界秘事』では、次のように説いている。

金剛界立五部^一 五部各有五部^二

仏部 毘盧遮那。仏部主故無母。般若菩薩、不動尊為明王^三。

金剛部 阿閼金剛部主、金剛波羅蜜為母。金剛薩埵、降三世為明王^四。

宝部 宝生宝部主、宝波羅蜜為母。金剛藏菩薩、軍荼利為明王^五。

蓮華部 觀自在王蓮華部主、法波羅蜜為母。文殊師利大威徳為明王^六。

羯磨部 不空成就羯磨部主、羯磨波羅蜜為母。金剛牙金剛夜叉為明王^七。

胎藏界立三部^一。三部各有三部^二。

仏部 大日如来為主、虚空眼為母。無能勝為明妃、不動尊為忿怒^三。

蓮華部 觀自在為主、白衣觀音為母。多羅菩薩為明妃、馬頭為忿怒^四。

金剛部 金剛手為主、忙莽鷄為母。金剛孫那為明妃、軍荼利為忿怒^五。（『興教大師全集』上・三二九―三三〇）

ここでは金剛界は五部、胎藏界は三部それぞれを建立し、五仏・五菩薩・五大明王の三尊形式が展開されているが、『五界秘事』のこのような両部曼荼羅觀については、『五略釈』とは異なり、どちらかといえば前掲の『秘藏記』に類似した曼荼羅觀を形成していることがわかる。

これは、ともすれば覚鑊の曼荼羅觀が『五界秘事』と『五略釈』の両撰述時期に於いて、その思想的変遷があったものと把握することも可能であり、もしくは覚鑊教学の多様性の一端を示すものとも換言できよう。ところが、金剛界を五部、胎藏界を三部とする右の理解については、例えば頼瑜（二二二六―二三〇四）の『薄草子口決』「仏眼」を開いてみると、次のようにある。

問。仏眼何部部母乎。答。御口云。胎藏有三部母。金界有五部母。仏眼是総母也云云。大師『宗秘論』云。第一毘盧尊仏眼

為部母。金輪非明王不動大忿怒、無能勝作明妃名曰如来部。第二阿弥陀大日為部母。馬頭大明王嚩語鈞忿怒多羅為明妃。○名属蓮花部。第三阿閼尊摩麼鷄是母。孫婆大明王、軍荼利大忿怒那利為明妃。○並為金剛部。三部三昧耶。○說三不説五文。『小野記』云。仏部虚空眼為母、蓮花部白衣觀音為母。金部如御作也。小野僧正『我秘記』云。仏部、毘盧遮那仏部主。故無母、般若菩薩・不動尊為明王。金剛部、阿閼尊金剛部主。金剛波羅蜜為母、金剛薩埵・降三世為明王。宝部、宝生宝部主。宝波羅蜜為母、金剛藏菩薩・軍陀利為明王。蓮花部、觀自在蓮花部主。法波羅蜜為母、文殊・大威德為明王。羯磨部、不空成就羯磨部主。羯磨波羅蜜為母、金剛牙・金剛夜叉為明王。文(大正藏 七九・一八二下―一八三上)ここには小野僧正の『我秘記』という記述が確認され、頼璩は空海の『五部陀羅問答偈讚宗秘論』すなわち『宗秘論』と、小野僧正つまり仁海の『我秘記』の内容を比較している。この中、小野僧正の『我秘記』と、覚鑊の『我界秘事』の内容が金胎两部とも合致していることが解る。よって、頼璩の示唆に依るのであれば、『我界秘事』の内容と、仁海の『我秘記』との間には、ある種の思想的影響関係を認めることができよう。

また、苦米地氏は覚鑊の本地無相法身觀を検討するに当たって、金剛界の仏を自受用身、胎藏界の仏を他受用身とする『我界秘事』の内容を取り上げ、これに対しては「東密の一般的な立場と一

致しない特異なもので、覚鑊の撰述にも他に見る事は出来ない」というように、『我界秘事』にて展開される教義内容が、覚鑊の他の著作と性格を異にすることを示唆している。よって、『我界秘事』については、ややもすれば真偽問題にも関わる要素がみられる為、『我界秘事』に於ける曼荼羅觀をもつてして、これを即座に覚鑊の説と見なすのは、慎重を要しなけらばならないと考えられる。

まとめ

小峰氏は、両部曼荼羅と四種法身説の関係性及び、覚鑊の胎藏界曼荼羅の背景思想を『秘藏記』に求めていたが、以上の検討結果から、大方は安然説の継承、もしくは敷衍によって形成されているとみるのが妥当であると考えられる。また、『大日經疏』からの影響という点については、氏の指摘するように直接依用する部分が見られるのも確かではあるが、その一方で、やはり安然教学に於ける『大日經疏』(『義釈』)理解を起点とし、そこから受容していると考えられる箇所があることも見落としてはならないのである。特に、中台八葉の諸尊を「八大法身」と明言している点、その証左となる。

松崎氏は、覚鑊の両部曼荼羅觀を通じて「平安末期という時代的背景の中において、当時の日本仏教界における最も有力なる法華・華嚴の兩一乗と金剛一乗すなわち真言密教とを嚴格に区別し、天台宗が著しく密教化するなかにおいて空海の教学の密教化を一段と進

め」たと結語していた。^②無論、覺鑊の教学形成の一背景には、空海の教学を再興しようとする姿勢があったことに對して否定する訳ではない。但し、覺鑊の曼茶羅觀を見る限りでは、「空海教学の密教化の促進」、もしくはその「徹底化」を意図していたとは考えにくく、密教教理の中に法華一乘や天台教学を包摂した台密説を如何にして意義付けるかという点に、その中心があったと考えられる。そこで覺鑊が採った方法こそが、安然を含む台密説の受容である。すなわち覺鑊は、安然の教学をあくまでも密教史上に於ける、一密教僧の教説として重視していたと考えられるのであり、こういった態度は、安然が空海教学の受容によつて自らの教学を形成した態度といわば同意趣の傾向にあるといえよう。また、そうであるからこそ、覺鑊の受容態度は極めて柔軟な姿勢となつてることが窺え、これは覺鑊と同時期の学匠であり、同じく台密教学からの影響を受けつつも、空海教学を篤志し、台密を含めた余宗の教理内容を痛烈に批判した信証（二〇八六―一四二）や実範（二〇八九―一四四）の学的態度ともまた、異なつてることが見て取れるのである。

苦米地氏は覺鑊と安然説の關係について、『教時義』との一致を強く主張していた。本稿の発揮点も、氏の示唆に依るところが大きいのであるが、以上の結果から、覺鑊教学では『菩提心義抄』も重要な位置にあつたことが確認されるのであり、しかもそこからの影響力は曼茶羅觀のみならず、三輪身思想に代表される、諸尊統合の理論にまで及んでいるのである。従つて、院政期を含む、初期の東

密教学の諸相とその特徴を説明する上では、今後より一層、台密教学との関連性に注意を払う必要があり、しかも細部に亘つて考察してゆかなければならないと考えられるのである。

註

- ① 『凡そ界曼茶羅略釈』の仁平写本によると本書には『二輪円徳抄』、『両界抄』、『両部曼茶羅功德略抄』の三本の外題があるという。
- ② 小峰弥彦『興教大師の曼茶羅觀（一）』（『興教大師覺鑊研究』・春秋社・一九九三年）
- ③ 『弘法大師全集』二・九
- ④ 『秘藏記』には次のようにある。
問。法身・応身・化身・等流身。此四種身者為一身所具、為各各出生此四種身耶。答。一身之所互皆具足。皆從一法門出現。問。然者此四種法身於曼茶羅何等其身。答。中台毘盧遮那為法身、四仏為應身、釈迦為化身、外金剛部龍鬼等為等流身。（『弘法大師全集』二・四二）
- ⑤ 『弘法大師全集』二・四八―四九
- ⑥ 『大日經疏』卷二には次のようにある。
今此中妙法蓮花漫荼羅義。毘盧遮那本地常心。即是華台具體。四仏四菩薩。醍醐果徳。如衆実俱成。十世界微塵數金剛密慧差別智印、猶如華葉。十世界微塵數大悲万行波羅密門、猶如華藏。三乘六道無量應身、猶如根莖葉莖榮暉相間。以如是衆徳輪円周備故、名漫荼羅也。然以如來加持故、從仏菩提自証之徳、現八葉中胎藏身、從金剛密印現第一重金剛手等諸內眷属、從大悲万行、現第二重摩訶薩埵諸大眷属、從普門方便、現第三重一切衆生喜見随類之身。若以輪王灌頂方之。則第三重如万国君長。第二重如朝廷百揆。第一重如宗枝内弼。中胎如垂拱之君。（『大正藏』三九・六一〇上―中）

⑦ 『大正蔵』三九・六二五中

⑧ 松崎恵水『曼荼羅觀』（『平安密教の研究』第七章興教大師覺鑊の教學・第八節・ノンフル社・二〇〇二年）参照。

⑨ 赤松祐道『興教大師覺鑊の曼荼羅觀について』（『智山學報』五三）号及び『豐山教學大会紀要』三二二号合同号・二〇〇四年）

⑩ 苦米地誠一『興教大師覺鑊の教主義について』②——本地法身と四種法身——（『仏教文化学会紀要』一号・一九九二年）

⑪ 但し、胎藏界の西北に配当される菩薩は觀自在菩薩である。

⑫ 但し、一般的な解釈（『大日經疏』・『義釈』）として、胎藏界の西方に位置する仏は「無量壽仏」である。

⑬ 六大法身や五種法身については、覺鑊の諸著作中に見られるところではあるが、例えば、『五輪九字明秘密經』「第二正入秘密真言門」・「九字九品往生門」では、次のようにある。

復次法身有五種。前四身并法界身故。曼荼羅有五種。前四曼加法界曼荼羅故。『聖位經』偈曰。自性及受用、變化并等流、仏德三十六、皆同自性身。并法界身故。成三十七也。又『禮懺經』。自性身外立法界身。依此等証文、四身之外有法界身。法界身者六大法身。（『興教大師全集』下・一一六〇—一一六一）

また、加藤精一氏は覺鑊の五種法身の形式が、安然の『教時義』の内容と類似していることを指摘している。加藤精一『六大法身の沿革』（『日本密教の形成と展開』・春秋社・一九九四年）

⑭ 尚、大正蔵本の『ミヤミ抄』は高山寺蔵本を底本としているが、『高山寺経藏典籍文書目録』卷三（九三三四上）にも、本文と同様の奥書が掲載されている。

⑮ 『諸宗章疏録』には「八法身記一卷 亦云曼荼羅抄千心。」（『大日本仏教全書』一「仏教書籍目録第一」・一七四下）とある。

⑯ 『ミヤミ抄』全文を検討してみたところ、本書は『菩提心義抄』卷三（『大正蔵』七五・五〇七上—五二〇下）に該当を完全に下敷きとして撰述された文献であることが判明した。しかし、完全なる謄

写という訳ではなく、恣意的な操作を随所に働かせているのである。その最たる例を挙げると、安然が天台教學の与奪二論のうち、与論を用いて密教と天台田教の同等性を示唆する部分に対しては、『与論』の内容を削除することで、真言教を優位に置く立場が示されるように改変しているのである。

⑰ また、安然は『教時義』卷三に於いても、『不空羂索經』の内容から三身一体説を展開しているが、同時に真言宗の教主觀として、四身互具四身の立場を宣揚している。

今真言宗意云、四身互具四身。是故呼自性身。則四身皆自性身、呼受用身。則四身皆受用身、呼變化身。則四身皆變化身、呼等流身。則四身皆等流身。何者、真如之理法界為體。若自性身無余身、理則非広博法界之理。受用之智受用法界。若受用身無余身、智則非広博受用之智。變化之用變用法界。若變化身無余身、用則非広博變化之用。等流之事等流法界。若等流身無余身、事則非広博等流之事。故『不空羂索經』云。三身一体皆平等毘盧遮那自性身。准而可云三身一体皆平等毘盧遮那受用身、變化身、等流身等也。此与天台三身俱体俱用大同。（『大正蔵』七五・四二〇上—中）

⑱ 松崎恵水『前掲書』参照。

⑲ 安然教學に於ける二輪身解釈については、拙稿「安然教學に於ける仏身觀——三輪身との関連を中心に——」（『印度學仏教學研究』第五卷第一号・二〇〇六年）、「三輪身の形成に関する一考察」（『仏教學研究』第六四号・二〇〇七年）参照。

⑳ 『打聞集』外題には、次のようにある。

永治元年八月廿五日、於『豐福寺』被修伝法会打聞集 初日（『興教大師全集』上・五五三）

また、奥書には次のようにある。

永治元年十一月廿二日伝法会十住心論談了（『興教大師全集』上・五六三）

②① 赤松祐道「前掲論文」参照。

②② 松崎恵水『前掲書』参照。

②③ 安然の空海説の受容態度については大久保良峻「安然と空海」
（『台密教学の研究』法蔵館・二〇〇四年）参照。